

## オフィスインテリア再考のヒント

### チームのための「テーブルワーク、空間

ワークスケープ・ラボ 代表 岸本章弘

#### 協働を支える機能

「組織の配置」から「機能の配置」へ、適業適所型オフィス空間への転換を目指して第7回コラムで提案した空間機能の4つのタイプ——ソロワークセッティング/グループワークセッティング/インタラクションセッティング/サービスセッティング。今回はグループワークセッティング、すなわち協働のための場所について考える。

情報処理型のデスクワークを中心に計画されてきた従来型のオフィスにおいて、ミーティングコーナーや会議室はデスクワークの合間に使われるサポートスペースであった。しかし、チームによるグループワークが増えれば、それらは協働作業のための「テーブルワーク」スペースになる。もちろん、従来のような短時間の打合せや報告連絡型の会議もなくなるわけではない。したがって、そこにあるテーブルと椅子の組合せに代表されるような伝統的な会議室の装備を見直し、より広範な用途や多様なチームの特質に対応できるような空間形態の選択肢を広げることが求められるだろう。

特に、一般的な会議シーンでよく見られるテーブルを囲んで参加者それぞれが手許に配付資料を持つスタイルは、資料に集中すると話し手の表情や動きは見落としがちになるし、他のメンバーの反応も分かりにくい。そんな欠点を補うセッティングの一つは、これもよくあるホワイトボードやモニターを共有しながら議論するスタイルの空間である。より高度なグループワークのために重要なのは、議論の焦点を手許の個人資料ではなく、机上や壁面上の共用の作業

面に向かわせることだ。また、提示すべき情報は目の前の議論の対象だけとは限らない。過去の経緯や背景情報を参照したり、将来の目標や計画も確認したい。製品やサンプルといったモノを持ち込みたい場合もあるだろう。

このように、テーブル面や壁面には、協働のための作業面として多様な情報の提示と共有を促す機能が必要になる。会議テーブルには「ワークテーブル」として、グループのデスクとしての使い勝手が求められ、電源やネットワークへのアクセスを容易にするケーブルマネジメント機能も必要になるだろう。そして、協働するメンバー間で議論の内容やアイデアを共有するために、それらを可視化し操作できるような道具立ても重要になる。進行中の議論から過去の経緯や各種参照資料、そしてその場での気付きやひらめきまで、あらゆる知識と情報を共有の作業面上に公開し、自由に修正・追記・組合せ



写真1：個人席の間に置かれた可動テーブルとホワイトボード。アイデアを思い起こしたり、作業の手戻りを減らすためには、途中経過をそのまま残しておくことも重要。

などができることが望ましい。ただし、可視化された情報をメンバー外にどこまで公開するか、その公開範囲をコントロールするセキュリティ上の配慮も同時に重要になる。

こうした機能をどのように組合せ、具体的な空間としてデザインするのか。以下では、短時間で小規模なテーブルワークの場としてデスクワークスペースの中に混在配置されるオープンセッティングと、より規模の大きい会議室やプロジェクトルームといった専用室としてのクローズドセッティングに分けて、それぞれのニーズについて整理してみる。

### オープンセッティング

日々の仕事の中にグループワーク比率が増えるほど必要度が高まるのが、即座に話し合える場所の確保だろう。デスクスペースに近く、特別な準備や事前予約の要らないミーティングスペースである。セッティングとしては、人数に応じたテーブルと椅子の組合せに加えて、鉛直

作業面も重要である。ホワイトボード、フリップチャート、モニターなどを設置して、議論の内容を可視化して参加者が共有することが重要である。筆記用具や粘着メモなどの小物もその場に常備しておきたい。(写真1、2)

デスクスペースの近くにまとまったスペースを確保するときには、フレーム型の構造体などで区画したり、壁際に設置すれば、開放感を損なわずにカスタムな機能の充実が図りやすい。フレーム上に取り付けられるホワイトボードやスクリーンなどは柔軟な仕切りとしても機能するし、プロジェクターやモニターなどの機器も常設状態にできる。PC等のための電源やネットワークへのアクセスポイントも設置しやすい。壁面があれば、可動パネルを立てかけたり、資料を貼り付けたりして、情報の一覧性を促してくれる。(写真3、4)

写真3(右)：配線機能とオプション取り付け機能を持つフレーム構造体で区画したテーブルワークセッティング。



写真2：ユニークな大型パッドのテーブル。手ぶらで座り、備え付けのマーカーで気軽に書く。書いたページは切り離して、そのまま持ち帰ることができる。



写真4：壁面と大判パネルを活用して、多様な情報の可視化と共有を促す。



写真5：どこからでも出入りできる半透明素材で仕切ったミーティングコーナー。



写真6：それ自体が空間を仕切るユニークな形態の椅子の組合せ。

また、視覚的に適度なプライバシーやセキュリティが必要な場合には、仕切りの素材や、家具の形状、さらには床面の高さなどを工夫すれば、活動状況は公開しながらも見える情報を制限したり、周囲の情景を適度に遮断して参加メンバーが集中しやすい環境を構成することも可能である。(写真5、6)

### クローズドセッティング

視聴覚面でのプライバシーの確保や、立ち入りを制限するセキュリティ対策の必要性、あるいは音響や照明などの室内環境の個別制御の要求など、多様な理由によってテーブルワーク空間は会議室などに仕切られる。しかし、効果的なグループワークのためには、メンバー間での情報共有や文脈の理解が重要になる。このことは、オープンセッティングの場合と同様である。つまり、クローズドセッ

ティングのデザインには、用途に合った仕切り方の部屋を選べるバリエーションが求められる。(写真7、8)

組織内で共用される会議室と特定のチームが専有するプロジェクトルームでは、さらに違ったニーズも生まれる。代表的なものとしてはプロジェクト関連情報の一覧化が挙げられるだろう。その部屋に入れば常に関連情報が一覧でき、進行状況や解決すべき課題が明確に見える。常に時間と場所を共有できるとは限らないメンバー間でも、個々の思い込みや記憶違いを最小限にとどめ、情報と意識を共有しながらそれぞれの作業に集中できる。あるいは、見えることで思い出したり新たな気づきが誘発される。デジタル化の広がりによって、ともするとブラックボックスの中にとどまりがちになる情報を、あえてアナログ的に可視化し一覧化することは、俯瞰と気づきを促す有効な手段であり、グループワークセッティングを仕切る壁面はそのための手軽な道具になる。(写真9)

また、クローズドセッティングのしつらえにおいて留意すべきことは、その利用時間の長さへの配慮であろう。特に、もともと短時間の利用を前提としたミーティングコーナーで採用さ



写真7(上)：通路からのプライバシーを確保しつつ、ワークスペース側には活動状況を垣間見せる会議室。



写真8：ホワイトボード兼用の半透明ガラスで仕切ったグループワークルーム。壁面に書かれた内容が、外を行き交う同僚に透けて見える。



写真9：全面がマグネット対応ホワイトボードで構成されたプロジェクトルーム。メンバーが共有すべき情報がいつでも一覧できる。



写真10：専有時間の長いテーブルワーク空間の中には、デスクワーク空間以上に多様な行動が長時間にわたって混在する。

れることの多い固定脚の椅子は、長時間にわたって多様な行動がとられるプロジェクトルームのような空間においては機能不足である。臨機応変に編成される期間限定のプロジェクトルームとして既存の会議室が転用される場合などには、そうした行為と支援空間のニーズは見落とされがちである。しかし、個別メンバーのデスクワークからチームのテーブルワークまで、多様な行動が混在することへの人間工学的配慮は、デスクワーク空間以上に重要である。(写真10)

## テーブルワーク主導の空間への移行

分業型の情報処理から協働型の知識創造へ、オフィスワークの変化に伴って、オフィスワークはデスクワークからテーブルワークへと移行していく。もちろん、それらがすべて置き換わるわけではなく、常に変化しながら混在することになるだろう。それでも、従来のようなデスクワーク主導の空間構成では、「慢性的な会議室不足」のような状況が続くことになるだろう。

幸い、テーブルワーク空間はデスクワーク空間ほどには従来のような組織変更の影響は受けない。その多くが特定の部署や個人の専用空間ではないからだ。したがって、「ユニバーサルプラン」の個人席デスクのように標準化しなくても特に非効率にはならないはずだ。むしろ、協働の用途や人数に応じて使い分けられるように、豊富なバリエーションを提供することが望ましい。デスクのそばですぐに使える小規模でオープンなミーティングコーナーから、大小さまざまな会議室群やプロジェクトルームまで、多様なニーズへの対応が求められるだろう。

そうであれば、それらの空間全体の計画においても、テーブルワーク空間とデスクワーク空間を同等レベルに混在配置できれば、より効果的な仕事の配分を支援できるはずだ。デスクワーク空間とテーブルワーク空間という各セッティングのデザインの再考の先には、それらをどう配分・配置するかという新しい空間計画のアイデア開発も必要になるだろう。



### 岸本章弘

ワークスケープ・ラボ代表  
 コクヨ(株) 設計部門でオフィス等のデザイン、研究部門で先進オフィス動向調査、次世代オフィスコンセプト開発とプロトタイプデザインに携わり、研究情報誌『ECIFFO』の編集長をつとめる。2007年に独立し、ワークプレイスの研究とデザインの分野でコンサルティング活動をおこなっている。千葉工業大学、京都芸芸繊維大学非常勤講師等を歴任。著書に「NEW WORKSCAPE—仕事を変えるオフィスのデザイン」。日本オフィス学会国際動向研究部会部会長